

PAN と JSPS の合同セミナー：
「創動運動による障害の克服：
リハビリテーション医療のパラダイムシフト」に対する謝辞

滝沢茂男¹

¹バイオフィリア研究所

今回の日本学術会議とポーランド科学アカデミーの二国間ジョイントセミナー選考は、我々のこれまでの研究活動をまとめ、世界へ報告する機会を与えた。人類に大きな貢献ができること心から喜んでいる。

二国間ジョイントセミナーの案内に、研究の開始と組織化を報道する 1998 年の NHK ニュース写真とビデオを用いた。研究所 WEB に載っている。その利用と内容の説明を致し、謝辞とする。市議員を辞めた私が、創動運動で障害を克服し、リハビリテーションのパラダイムシフトを実現するための組織をどのように作ったか、二国間ジョイントセミナーの選考の様な機会は二度とないと思われるので、NHK ニュースの成り立ちを紹介させていただく。

私たちの研究は、寝たきりの入院患者の 30%が介護力強化病院（旧制度）で歩く能力を再獲得したことを発見したことから始まった。私は 1998 年 9 月 7 日に創始者、発明者として、この会議を組織し、開催した。NHK は全国に、ニュースとして、NPO バイオフィリア リハビリテーション学会の旧名称団体の設立を報じたのであった。研究会会長長岡病院福井圀彦 副会長木島英夫 事務局長滝沢茂男 顧問：日本臨床整形外科学会の直前理事長金井史郎・国立障害者リハビリテーション病院院長木村哲彦と、やめた市議員では組織し得ないような錚々たるメンバーが集まったのだ。金井直前理事長は、こうした私の活動を見て、「俺たちが、気が付かなければいけなかった。」と話していた。この思いを共にした多くの仲間の当初から現在に至る研究活動が、我々の研究全体を俯瞰した会議としての二国間セミナーに採択された。そしてこのことは、題名が示す大きな目的をこれから実現することを可能にする。

なぜ集めえたのかを私の行動から説明する。

青春の思い

「必ず死ぬのになぜ生まれてきたのだろう」哲学するものの最初の問いだ。

私は青春のさなかで、この問いにとらわれ、読書の中にその答えを見出そうとした。結局自分で決めなければならないと理解した。私は何年にもわたるこうした哲学への答に「私は世の中をより良くするために生まれてきた」と定義することで、哲学から卒業した。そして二十歳の時に政治家になろうと決意をした。所得倍増計画に見られた政治のリーダーシップが、日本に戦後の荒廃から豊かさをもたらしたからだ。時の総理大臣が進めたものだった。私も国民にそうした希望を与えることを持って自分の人生を律する、そう決意をしたのだ。

高校時代の学習で、共産主義は他者からの収奪により、繁栄し、間違っている、と確信していたため、共産主義を打倒しようと考えた。

大学卒業後の語学留学で、イルクーツク中央公園で、端から端まで並んだ足を失った傷病兵の姿を見て、私たち数の多い団塊世代の高齢になった後の社会への心配が生まれた。この二

つを解決することのためにそうあろうと決めた。二つを実現する決意でいた。

私の意志を決めるための、私にとって最も効果的な言葉はエーリヒ・フロム著の希望の革命序文にある。「本書は・・・述べた考え方を再構成して私たちの多くの中になおも存在する生命への愛『バイオフィリア』に訴えようとするものである。生命を脅かす危険を十分に認識した時に初めてこの潜在力を動員して私たちが社会を組織する方法に徹底的な変化をもたらす行動に移ることができるのである。私は成功の可能性について楽観しているわけではない。しかし生命が勝利を収めるための真の可能性、たとえわずかな可能性であっても、がある限りパーセンテージや確率で考えてはいけないのだと私は信じている。」

27歳で市議員選に立候補・最下位近くで落選

27歳で市議員選に立候補した時の結果は、670票最下位に近い成績で落選した。藤沢の市議員になり、共産主義に染まっていた市政を打倒するの思いで立候補した。誰もがあきらめるといったようだが、4年後31歳1934票と3倍近い票を得て当選した。

このことは、市内の医師に大きな影響を与えたようであった。

当選の時に市医師会の市議員に対する祝賀会である医師から、「なぜそんなに若くて議員になると思ったのだ」と問われた。

私の回答は一言であった。

「医師は個を診る、私は群を見る。」この言葉は、私は共産主義の打倒と持続可能な高齢社会の確立を目的としていたため、その時「何でそんなこと聞くんか」という思いで答えていた。

この回答は質問者にショックを与えたようであった。

藤沢市を市民連合という共産主義市政から解放し、より良くする活動は「ロマンの海って何という」活動報告にまとめられて、国会図書館に収蔵されている。Kindle本として無償提供する予定である

団塊世代が高齢になった時の生活を守る

そして、「私たち団塊世代が高齢になった時の生活を守る。」を実現するために人生をかけることになった。

「少ない介護で生活自立ができる。」

それは「私の母（一人のPT）が多数の人を同時個別に自律的な運動リハビリになっている」ことの認識から始まった。

生活自立ができる。この可能性を、私が議員になるための選挙活動で、母の紹介でお願いする戸別訪問先で、「人々が後遺症がありながらも可能な限りの自立生活をしている」のを見て確信した。

以来私は、母のリハビリ手法を、一つの手法として普遍化し、社会提供する必要があると確信した。

そしてその活動をした。

「私は「神様のように」と患者さんから言われる」そう話す母は1万通り以上の方法で治療しているので患者さんが機能再獲得することは私以外に実現できない」として彼女のやり方が

システムであると主張する私の意見に同意しなかった。さらに彼女のしていることを情報開示することはなかった。

先に述べたように私の議員としての活動は共産党市政の打倒にあったため、市内全域を活動領域としていた。そのために応援する県会議員には高く評価されており、会うたびに、一緒に政治活動をするたびに、「あなたは私の後継者だ」と公言されていた。

また、共産党の市長を追い落とすために、2名の後継者を出して市議選立候補を辞退した時に、その市長は次回選挙に出ないからと・・・別の対立候補の立候補を促したと、噂された。

私は、退職以来毎日、「情報開示しろ」と母を説得した。毎日のことで、父親には大変うるさいようであったが、私の妻に「県会議員になるまでの我慢だ。」と言っていたと聞いた。

敬愛する県会議員の退職の時期が来て、私に後継指名がなされた。人を介して後継者として立候補してくれと言う依頼を一旦は受託した。しかし、「あんたの仕事は政治でしょ、人の仕事に口を出さないでよ。」と、母は言っていた。母は私の説得を無視していたので、私は、「私が県会議員を諦める以外に情報開示の手段がない、」そう受け止めた。

私の思いは先に述べたように大きな二つの目的の実現を私の人生の価値としようとしていたことから一旦は受諾したものの、一人の政治家のありようよりも重要な社会への貢献を実現するために、断らざるを得なかった。そして断りを入れた。すなわち私は市民から、政治の世界から完全に消えたとされたのである。

そして県議選が終わると、母はすぐに情報開示に応じた。私は、全てをコンピューターデータ化した。

東大整形外科の治験

この頃、NEDOの助成を得て、歩行器の開発を行っていた。そのために、東京大学・慶応大学をはじめ多くの大学のPTが母の紹介で集まっており、歩行器の機能と、利用効果の検証のために委員会を作ることができた。

さらに治験委員会を作ることができ、東大整形外科の大江医師の協力で治験登録をし、治験が進んでいた。このメンバーを中心に、私は母のリハビリテーションを組織的に研究するために21世紀リハビリテーション研究会（バイオフィリアリハビリ学会）を作ったのだ。そしてPTの力を借りて産まれた本が、「寝たきり老人を歩かせる」である。1996年1月に脱稿した。そのために初めは、メンバーは全員PTで、それ以外は私と友人たちという構成であった。そのころ、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部片石修三福祉機器専門官の紹介で、国立リハビリテーションセンター病院の副院長であった木村哲彦氏を尋ね、協力を依頼した。彼の回答は「このメンバーには医師が一人もいない。医師が参加したら協力することもできる。」というものであった。

医師の参加に向けて

私はそこで私の本来業務である政治の場を借りて、その課題を解決する以外に方法がないと

考えた。脱稿したことから、引用が可能になっており、市長選で訴えるべく、立候補した。立候補の表明から選挙までは1月もなく、落選は覚悟であった。この頃のことを慶応のPTは、「このごろ来ないと思ったけど、選挙に出たのか」と表現した。この時の新聞記事には、「僕らは団塊の世代、小学校でも中学でも卒業してから体育館が出来たり、プールが出来たり、死んでから高齢社会の体制が整うんじゃない」と述べたと、報道されている。

現在大問題になっている、私が属する団塊世代の高齢化、超高齢社会を見据えた選挙であった。

誠に幸いであったが、藤沢に先見の明のある木島英夫藤沢市整形外科医会会長がいた。彼とは面識もあり言葉も交わしていた。彼とともに所属していた団体の会合で、落選後すぐ出版した「寝たきり老人を歩かせる」を手渡した。彼は一瞥すると、私に50冊購入すると言ひ、さらに、私に彼が校長していた湘南看護専門学校のリハビリの教師として勤めてほしいと依頼をされた。私は選挙前から、塾を開いていた。また議員に当選した。そんなことで、市内ではいつも「先生」と呼ばれていたが、10年の永年勤続表彰を受けたときは、本当の先生になった気分だったことを覚えている。

私は、リハビリについて、選挙でも授業でも、自律的運動リハビリテーションが人々の障害を克服し、生活自立を守ることができることを訴えた。こうした活動が、藤沢市臨床整形外科医会木島英夫会長、藤沢に在住の日本臨床整形外科学会金井史郎直前理事長の目に留まったのである。

金井直前理事長は、こうした私の活動を見て、「俺たちが、気が付かなければいけなかった。」とした、
こうして、NHK 報道の会合を開催することになった。

木村副院長に医師の参加と、臨床整形外科学会誌の論文採用を報告すると、参加してくれた・さらには私の住むところから遠い大分県から日本臨床整形外科学会の縁で豊後大野市医師会会長である岡本雄三岡本病院院長がメンバーに参加してくれた。

これが今回の二国間ジョイントセミナーの案内をしているトップページに載っている NHK の NEWS に至った経緯である。

二国間セミナーへの採用

今回二国間セミナーへの採用は、こうした私の多面の活動から実現できた最初の会合の詳細を述べる機会を与えてくれたことと併せ、世界に向け、リハビリ医療の多様化、高齢者の自立生活を可能にする手法の報告ができる機会を与えた。

私は団塊世代の将来生活を予測し、取り巻く社会の状況に警鐘を鳴らしてきた。高齢社会の到来への危惧、年を経るたびにその危惧が実現に向かっていく様子、私はそうしたこともこれまで総説論文として幾度か明らかにしてきた。中にはリハビリ医療についての

批判を嘘とする者もいた。

今回社会の状況に対する、これまでの報告やその解決に向けた障害者高齢者が、自立生活が可能になることの重要性を指摘する中で、その方法として私が米国で特許を取り、本を出し取りまとめた創動運動を中核とした介入手法について、ポーランド科学アカデミーと日本学術会議の選考により、「創動運動による障害の克服とリハビリ医学のパラダイムシフト」として、セミナーが持てた。

この合同セミナーは、私たちの研究の長い歴史、リハビリテーション医学の多様化、そして高齢者が自立して生活できるようにする方法について世界に報告する機会を提供した。

こうした大きな目的を実現することを可能にしてくれた二国間のセミナーを採択してくれた皆さん、二国間のセミナー採択可能にした道筋をつけてくれた、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部、大臣官房国際課、WHO と ISPRM そしてこれまで研究に参加してくれた皆さん、研究を報告する機会を作ってくれた海外の研究者に心から感謝を申し上げる。

終わりに、自律的運動リハビリの研究の経緯を明らかにできることは、私にとって、創始者・発明者として、大変な名誉であり大きな喜びである。

我々の研究が、人類に福音をもたらすことを祈念しつつ、謝辞とする。

ありがとうございました。